

『れんげ草の少女』

著作 a s h

(第一回かのかのんSSこんべ参加作品)

※この話は『kanon』を元にした二次創作です。

一面を優しい紫色に染めて、れんげ草が揺れている。

春の風にその身を任せるように、ふわりふわりと。

その中に、一人の少女がいた。

少女はせっせとれんげ草を摘んでいた。

穏やかな周囲の雰囲気とは裏腹に、少女は何かを堪えるような表情で、ただひたすら摘んでいた。願いを込めるように。摘んだれんげ草に自分の想いを託すように。

それは――遠い日の風景。

『れんげ草の少女』

『れんげ草の少女』

とある春の日。

俺はいつも読んでるマンガ雑誌を買うために、のんびりとした足取りで商店街へと歩いていた。

天気はまさに好日そのもの。

「平和だなあ」

あまりの気持ちのよさに、思わず口に出してしまった言葉。だが、自分で妙なおかしさと一緒に、ちよっとだけ幸せな気分にもなれる、そんな感じだ。

と言う具合に、俺がいい気分で歩いていると、後ろの方から聞き慣れた遠慮のない声が届いたのだった。

「祐——っ」

…俺の名前を堂々と、しかもためらわずに大声で呼び捨てにするのは、俺の知る限りじゃ一人しかない。

「どこ、行くの——っ？」

そう叫びながら俺の方に走ってきたのは、真琴だ。俺が出掛けたときはいなかったんだがなあ。

ともあれ、その場で足を止めて待っていると、俺のそばに着いたとき真琴は肩で大きく息をしていた。たぶん、これまでにそれなりの距離を走ってきたのだろう。

「あうっ、あつ、あつ、いよう……」

「俺はちよっと買い物だ」

さすがにその状態だと話もあまりできそうにないなと思って、俺は用件をごく簡単に告

げて、そのまま待つことにした。

しばらくしてから、真琴の用事なんて大したことじゃないだろうなと決めつけて、ゆっくりと俺が歩き出そうとすると、真琴がそれを止めるように俺の手を取った。

「ねえねえ、買い物って言っても、どうせ祐一のことだから、大したことじゃないんですよ？」

どうせ祐一のことだから、か…。

そりゃまあ、目的は雑誌だけだな。そのまま「ああ」とうなずくのもくやしいので、ひとまず反論だけしてみる。

「そりゃ、人それぞれだろ？」

だが、真琴は俺の反論なんて全然気にする様子もなく、嬉しそうに返してきた。

「だって祐一だもん、たかが知れてるよね。ね、ね、それよりも、真琴、いいもの見つけたんだ。だから、見に行こっ」

「いいものって、ピロのミルク飲みの様子でも見せようってのか？」

「何なの、それ？」

「何でもない。気にするな」

「とにかく、いいものなんだから、行こうよっ」

今ひとつ釈然としないものの、そのまま言うからには、少なくとも「ミルク飲みピロ」よりはましなのかも知れないな。

それに、何と言っても、だ。

「何ボケッとしてるの？ ほらっ、早く！」

『れんげ草の少女』

本当に嬉しそうに俺の手を強く引つ張る真琴を前にしては、何も言えないよな。

「ああっ、分かったって。だから、そんなに強く引つ張るな！」

「祐一が遅いのようっ」

何を見せたいのか分からないが、とにかく楽しそうな真琴につられるように、俺も負けずに足を速めた。

そして――

「ほらっ、ここよ、ここ！」

真琴の案内が終わったとき、俺は郊外の……本当に町外れと言うのが正しそうなところに立っていた。辺りは薄紫と緑の混ざったような景色だけの。

「ね、凄いでしょ？」

真琴は一人で嬉しそうにしている。俺は何もない場所にしか見えないのだけど。

「何が凄いだよ？」

「何って、分からないの？ ほら、このお花よっ！」

「お花？」

と、そこでようやく真琴が何を言ってるのかが分かった。それと、さっきから目に入ってる薄紫と緑の風景のことも。

町外れの田んぼ一面に、と言うのはちよつと大げさかも知れないが、かなりの広さで（田んぼと思われる場所に）れんげ草が咲いていたのだ。

「れんげ草か」

「ね、綺麗よねっ！」

『れんげ草の少女』

同意を求める言葉がもはや断定口調なのは、真琴ならではと云うところだが、別にれんげ草が一面に咲いてるからと言って、それだけで大げさに感動することでもないなと思つて、俺は適当に相づちを打つだけにした。

「まあな」

すると、たちまち笑顔からふくれっ面にと、真琴の表情が変わる。

「何よ、その素っ気ない返事はっ」

「だってな、お前があんまりもったいぶるから何があるのかと思つたら」

「綺麗じゃないのっ」

「そりゃ、そうだけどな」

「あーもうっ！ 祐一を誘つた真琴がバカだったわ」

「まあ、綺麗は綺麗なんだけど、それだけつてのものな」

「もう知らないわよっ！」

俺の弁明など聞く耳を持たないと言わんばかりに、真琴は一気に怒つたかと思つたら、それだけ言い捨てて、一人で走り去つてしまった。

…せっかく買い物をやめて付き合つてやったのに、何でそこまで言われなきゃいけないんだよ？

ま、いいか。こんな場所に一人で突つ立つていてもしょうがない。

と言うわけで、俺は走り去つた真琴のことをちよつとだけ気にしながら、商店街の方へとまた歩き出そうとした。だが、そのとき何気なく視界の片隅に見知った顔を発見した。

入れ替わるようにやってきたのは、天野だった。

『れんげ草の少女』

俺が当初の目的を果たして家に戻ったとき、真琴はまだ帰っていなかった。れんげ草のところで別れてそのままだったが、いくら真琴でも一人で帰ってこれるに決まってる。

ひとまずは買ってきた雑誌でも読もうかと思ひ、そのために飲み物を探しに台所に行くど、当たり前のように秋子さんがいた。

「祐一さん、帰ってたんですか」

「ちょっと買い物に行っただけですよ、俺は。もつとも、途中で真琴に付き合つて道草くつてたんですけどね」

「あら、二人でどこに行つたのかしら？」

そう言いながら、秋子さんは楽しそうに笑みを浮かべている。これは勝手に解釈してるに違いない。

「いきなり『一緒にこい』って連れて行かれただけで、何でもないですって。それも、ただれんげ草が咲いてるだけのところに、ですよ？」

俺は「冗談じゃないよ」と言う仕草をしながら事情を説明したつもりだったが、秋子さんにはあまり効かなかつたらしい。秋子さんは相変わらずの笑顔そのままだ。

「そう言えば、れんげ草の季節ですね」

「あの一面のれんげ草ってのは、何か意味あるんですか？」

「田んぼ一面にあるのは肥料の役割ね。蜂蜜にもよく使われる花ですけどね」

「へえ、それじゃ意味はあるんですね」

「そうね。でも、それだけじゃあないでしょ？」

『れんげ草の少女』

「まだあるんですか？」

「綺麗じゃないですか」

「あー…」

「ふふ、祐一さんがそんな調子だと、真琴も張り合いがなかったでしょうね」

さすがに秋子さんは呆れたと言う様子ではなかったが、クスリと一笑する、そんな風にして台所から出ていった。

やれやれ…あんな風に言われちゃ立場もないな。別にれんげ草を見て、本当に何も感じなかったわけでもないのに。

何となく居づらさを感じた俺は、とにかく適当に飲み物を用意して、自分の部屋へと戻っていった。

だが、自分の部屋に戻って、買ってきた雑誌を読もうとしたとき、何気なく天野のことが頭に浮かんできてしまった。

れんげ草の野原（正確には田んぼだけど、この際そう呼ぶとしよう）から帰ろうとしたときに俺の視界に入ったのは、確かに天野だった。でも、俺はそのとき声を掛けずに立ち去った。

俺がそこにいたのが大した用事ではなく、天野も俺に気づいた様子はなかったし、ただ通りがかっただけなんだろうと思っただけからだ。

そして、俺が一度だけ振り返ったとき、天野はれんげ草の野原の中にいた。

すでにかなり離れた場所にいたので、実際に何をしているのかは分からなかったのだが、

『れんげ草の少女』

野原の中にじつとうずくまってるような感じだった。ただそれだけのことなのに、何となく気になってしまったわけだ。

別に気にする必要はないとは思うんだけどな…。

ここは予定通り、雑誌を読むとしようじゃないか、相沢祐一よ。

…。

…。

ダメだ、こりゃ。

いったん気になったら、止まらないぞ…。

こうなったら、ここで悩んでいてもしょうがない。

真琴もまだ帰ってこないことだし、ちよつと様子を見に行ってみるか…。

結局俺は雑誌をベッドに放り投げて、さつき天野を見かけた場所——れんげ草の野原へと向かうことにした。

我ながらバカみたいだなと思いつつ、れんげ草の野原へと歩いていると、前方にまたもや見知った顔を発見した。

と言っても、天野じゃない。いや、正確に言うと、天野の姿もそいつより少し離れた場所に発見したのだが…一体何をやってるんだろうか、あのバカは。

俺が近づいてみると、そいつ——真琴はじつと物陰から天野の様子をうかがってるらしく、俺のことに気づく気配が全然ない。

やれやれ、一体何を真剣に見てるんだよ…って、その視線の先にあるのは、天野しかい

『れんげ草の少女』

ないわけだよな。

普段はお調子者で傍若無人でわがままでお子様な真琴だけど、こと天野に関してはまだ特別な思いがあるのだろう。いくら俺が鈍感でも、それは分かる。それでも、ずっとそのままにしておくわけにも行かないだろう。

れんげ草の野原にいる天野に悟られないように、そっと真琴の後ろにつくと、俺は真琴の背中をトントンと軽くつついた。

だが——それがまずかった。

「うわっ！ な、何なのよう！」

真琴は大げさに声を張り上げて、俺の方に振り返ったのだ。

なので——当然のように、それは天野の知るところになったらしい。

「え……」

真琴よりも遙かに小さく声を上げたと思ったら、天野は大きな声のした方——俺と真琴のいる方へと頭を向けた。

が、今度は俺が思わず声を上げてしまう番だった。絶句とともに。

「あ、天野……」

れんげ草の野原の中で、俺たちに向けた天野の顔。

それは泣き顔だったのだ。

これはまずい。

非常にまずい場面だ。

「あうっ……」

『れんげ草の少女』

背中をつつかれてあわてふためいていた真琴も、俺の動きが止まってることに気づき、俺の視線の先にあるものを見て、事態をどうにか理解したらしい。

そもそも真琴が大声を出すから悪いのだが、こうなってしまつては素知らぬ顔で立ち去るのが一番いいのかも知れない。

そうだな、うん。

とにかく悪いのは、びっくりして大声を上げた真琴なんだ。

「わ、悪かったな、邪魔する気はないから」

どうにか取り繕うように、俺は天野から視線をそらして、それだけ言つて立ち去ろうと試みた。

「あっ、相沢さん」

「いや、ホントに悪かった。別にのぞきとかするつもりじゃなかったんだ」

「…いえ、別にいいんです、そんなに気を遣つてくれなくても……」

「気を遣うとか、そんなんじゃないやなくてだな、ま、とにかく俺たちは帰るよ」

「あーっ」

とにかくこれ以上はここに留まるべきじゃない、そう決心して真琴の手をつかんで帰ろうとしたとき。

「待つて下さい。相沢さん、それに、真琴も……」

今度は天野の声で止められた。

天野がここで何をしていたのか、気にならないとは言えないが、天野にだつて話したいことと話したくないことがあるはずだ。だから、俺たちはその場から立ち去ろうとした。

『れんげ草の少女』

だが、天野が待ってと言うのなら。

俺たち二人に待ってと言うのなら。

聞いてもいいんだらうか、俺は。

「…いいのか？」

いくつかの意味を重ねた問いかけをすると、天野は分かっているのか、自分の頬を伝っていた涙をハンカチで拭きながら、ゆっくりとうなずいてみせた。

「もう、平気ですから」

何を指しているのか、俺にはまだ分からなかったが、それでも天野が自分でそう言うのだから、これ以上の問いかけはいらないのだろう。

「そうか」

俺も一回だけうなずくと、あらためて天野の方に向き直して、ゆっくりと天野のいるれんげ草の野原へと足を進めた。真琴も俺の後に続いている。

「あうー…」

いつもの口癖しか言わなかったが、それだけで天野には通じたらしく、天野は微かに笑みを浮かべながら、真琴に答えた。

「ありがとう、真琴。でも、本当にもう、平気だから」

そして――

天野は俺たちに向かって、言葉を続けた。

「このれんげ草は思い出があるんです…。あのとき、わたしはこの花に願いを託していたんです……」

『れんげ草の少女』

春の日差しの中、一生懸命にれんげ草を摘んでいた少女の願いは、ただ一つ。

「苦しんでいるあの子の、苦しみがなくなりませうように」

誰かから聞いた花言葉にすぎるように、れんげ草が咲いている場所に向かったのは、ただその願いを叶えて欲しかっただけだった。

だが、それは一つの冷酷な事実を受け止めているゆえの、願いでもあった。

「消えちゃうから」

「もう一緒にいることはできないから、せめて苦しみだけでも和らげて」

その事実だけではどうしようもないのだと、すでに少女もあきらめていたから。

だから、何も叶えられなかった。

いや、少女の願い自体はほんの一時だけ、叶えられたのだった。

少女が望んだ相手がれんげ草の花を受け取ったとき——心の底から安らいだ笑顔が少女に見せてくれたのだから。

『れんげ草の少女』

天野の言葉が止まる。

その言葉から、俺には「あの子」が誰のことなのか分かった。いや、正しくはそいつの名前とかは知らないのだけど、どんないきさつがあったのかも詳しくは知らないのだけど。それでも、ただ一点については、痛いほどに分かってしまった。それは俺と天野の共通点だから。

「天野、もう……」

そんなことは無理に話さなくてもいいと俺が言う前に、天野は小さく頭を横に振って、俺の言葉を制止した。

「そのときのわたしの願いは確かに……叶えられませんでした。だって……そのときすでにわたしはもうあきらめていたんですから。どうにもならないって思ってたから、この花を必死に摘んでいたんです。だから……」

少しだけ声が沈んだ調子になって止まったかと思ったら、不意に天野は真琴を見つめながら、それまでよりは数段明るい声で続けた。

「今は平気ですよ。わたしには真琴と相沢さんがいてくれるのですから」

そこまで言わせたら、俺の出る幕はないって感じだな。

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、邪魔しちゃったかな、やっぱ」

何となくばつが悪い気がして、俺が苦笑気味に言うのと、天野はわずかに顔を伏せるようにしながら、微かな笑みを見せた。

「いえ、そんなことはありません」

これまでのいきさつがどうあれ、少なくとも今はそんな表情ができるのだから、それで

『れんげ草の少女』

よしとしておこう。

「そうか」

「だって、わたしには……」

と、天野がそこで言葉を切って、れんげ草で作った輪っかを真琴に向けて差し出した。花冠ってやつだよな、これは。

「え？ これ、真琴にくれるの？」

「ええ、あなたにもらって欲しいの」

「えへへっ、嬉しいな、ほら、祐一どおっ？」

さっきまでの縮みようとは比べものにならないほどに、真琴は体全体で嬉しさを表している。単純と言えばその通りだが、こうした純真な一面もまた真琴ならではだろう。

だから、俺は花冠をつけた真琴を見て、素直に思ったことを告げた。

「ああ、綺麗だな」

花も真琴も、そして天野も。

それは天野の想いの純粹さなのかも知れない。真琴自身の純粹さなのかも知れない。とかく、今の真琴も天野も、綺麗だなと思った。

「そうよねー、何って言っても、美汐が真琴にくれたものだから、当然よねっ！」

これ以上もないほどに嬉しそうな笑顔を見せる真琴。

ああ、そうか。

これがあるから、この笑顔があるから、天野も綺麗なんだ。

この真琴の無邪気な笑顔があるから、天野も笑顔でいられる。

『れんげ草の少女』

そうだよな。

俺はこの笑顔を、憎たらしいこの笑顔を守っていかなくちや、だよな。

…と、俺が密かにしかもかっこよく決意を固めていると。

突然、真琴の叫び声が響いた。

「あうーっ！」

一体何ごとかと思つたら――

「あうーっ、こっちに来ないでようっ」

真琴は片手で花冠を押さえながら、もう片方の手をぶんぶんと振り回していた。

何だ？ と真琴の様子をよく見ると、真琴の周りにブーンと羽音を立てて…蜜蜂が飛んでいた。

あー…そう言えば、秋子さんが言つてたよな。蜂蜜に使われる花だつて。

それにしても、これだけ一杯咲いてるのに、真琴のところになんかわさわさやってくるなんて…蜂にも物好きはいるもんだな。

「真琴、ひとまずその冠をはずした方がいいと思うぞ」

「いやよ、これは真琴にとって、美汐が作ってくれたんだからあつ」

「無理すんなつて」

「絶つっつっ対にはずさないわようっ」

結局、真琴は蜂を追い払うことに専念して、花冠を取ろうとはしなかった。それを見ながら天野も呆れたように口を開く。

「真琴…」

『れんげ草の少女』

真琴自身はすっかりパニック状態だったのだが、そっと天野が続けてつぶやいた言葉が俺には聞き取れた。

「…ありがとう」

それから――

どうにか蜂を追い払った頃には、真琴はすでに刺された後だった。そんなわけだから、れんげ草の野原に長居することもなく、俺たちは家に戻ったのだが。

「あう……イタイよう、においがしみるよう」

「我慢してね」

手当をしている間も、手当がすんでしばらくの間も、真琴はずっと「イタイ、しみる」を繰り返しているだけだった。

その一方で、真琴に名誉の傷を負わせた花冠はと言うと――

秋子さんが綺麗な状態で保存できるようにと、色あせの少ない方法でドライフラワーにして、ケースに収めてくれた。

それを、真琴が自分の部屋に飾っていたが、真琴の笑顔がある限り、天野の笑顔がある限り、花冠もなくなりはないだろう。

だって、それは二人の想いのしるしなのだから。

(れんげ草……感化・私の幸福・心が和らぐ・苦痛を和らげる、など)

2016/05/26 補足説明

結果……順位は171作品中39位、得点は56.2ptsでした。

採点内訳…… 5点:7 4点:52 3点:79 2点:25 1点:5 と、平均からやや上くらい
の点数付けをされたことが分かりますが、大体自分の予想通りの点数配分でした。

(ちなみに、このこんぺー位の作品は「38pts」、最下位の作品は28.97ptsでした)

体裁をB6PDFにして改ページをいくつかはさんだ以外、本文の改訂はしていません。

こんぺ発表時は横書きの標準的なHTMLテキストで、回想部分(この書式ではゴシック
体になっている部分)をセンタリングで表現したところ、これについての意見(読みづら
いなど)もいくつかありました。

基本的な設定は自分の真琴シリーズを踏襲しているものの、本作のヒロインはどちらか
といえば美汐になるのが複雑。とはいえ、基本的な部分(美汐はどうして狐が消えること
を知ったのか。これは自分の経験に基づく知識ではないのか?)に関して突っ込みどころ
があるのが何とも苦しいところです。

a s h